

# 霞

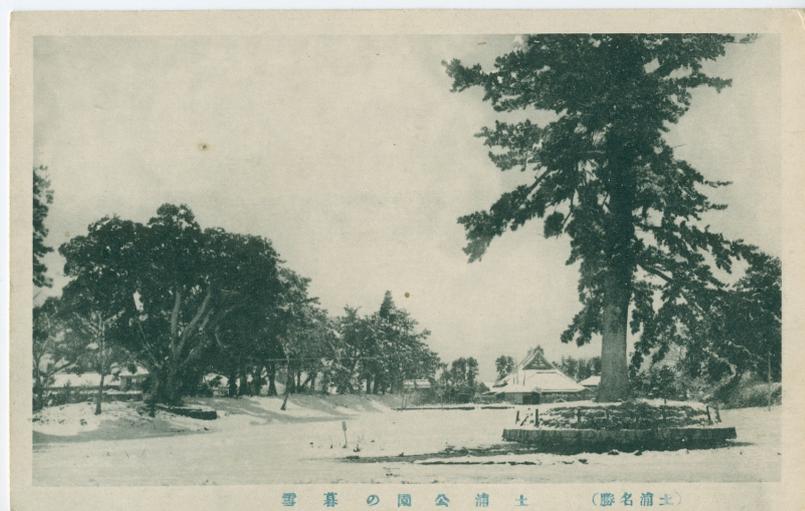
—2012年度冬季展示室だより—

土浦市立博物館

平成24年12月11日発行(通巻第22号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(22) 絵葉書 「(土浦名勝)土浦公園の暮雪」



雪暮の園公浦土 (署名浦土)

左手に亀城のシイ(茨城県指定文化財)、つきあたり奥には神龍寺本堂の屋根がみえます。土浦城址は昭和9~10(1934~35)年に公園として本格的に整備されました。昭和10年に名称が「亀城公園」と統一されるまでは、「土浦公園」とも呼ばれていました。【情報ライブラリー検索キーワード「亀城公園」「土浦公園」】

### 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(22)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び展覧会と催し物等】
- 中世陶磁器の流通(中世)・・・2
- 法雲寺庄主寮年貢納目録(中世)・・・3
- 土浦城模型を楽しむ-前編-(近世)・・・4
- 江戸時代の日記にみる正月行事(近世)・・・5
- 商家に伝わる市松人形(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「新治地区の石仏調査」・・・8
- コラム(22)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

## 博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 1月20日(日)、3月17日(日)

いずれも午後2時~(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール  
「土浦でも世界遺産を目指そう」と題し、筑波山麓と霞ヶ浦周辺の遺跡についてお話しします。

★★参考展示「昔のくらしの道具」★★

1月5日(土)~31日(木)

小学校3年生の校外学習に合わせて、ちょっと昔のくらしの道具をご紹介します。

★★どんど焼き★★ 1月12日(土)

会場:桜川河川敷(学園大橋下)  
正月飾りを燃やし1年間の無病息災を祈ります。  
先着200名にお餅を配布します。



博物館マスコット  
亀城かめくん

★★はたおり作品展★★ 2月23日(土)~3月3日(日)

はたごしらえ講座受講生・むいむいの会・綿の実の会の作品を展示します。

★冬季展示は12月11日(火)~3月8日(金)です★

★特別展は3月16日(土)~5月6日(月)です。

開館25周年記念として「婆娑羅たちの武装一戦国を駆け抜けた武将達の甲冑と刀剣」を開催します★

### ★休館のお知らせ★

- ・毎週月曜日(但し12月24日・1月14日・2月11日を除く)
- ・12月25日(火)
- ・年末年始(12月28日~1月4日)
- ・1月15日(火)
- ・2月12日(火)
- ・臨時休館 3月12日(火)~15日(金)  
(特別展準備作業期間)

### ★祝日開館します★

- ・12月24日(月)
- ・1月14日(月)
- ・2月11日(月)

### ★無料開館日★ ※展示室1・東櫓のみ公開

- ・3月9日(土)
- ・3月10日(日)

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 中世陶磁器の流通

## — 貿易陶磁と国産陶器 —

中世（12～16世紀）の焼き物は、土器と陶器と磁器の大きく三つに分かれます。土器には、古代の土師器の伝統を引く土師質土器と表面に炭素を吸着させ黒ずんだ瓦質土器の二つがあり、全国各地で作られました。一方陶器は、土器よりも保水性に優れた焼き物で、<sup>うわぐすり</sup>釉をかけた古瀬戸や釉をかけない常滑などの東海地方（愛知県）産が多く、これらは東日本を中心に流通しました。また、磁器は、粘土に加え石英や長石などを主原料に、ガラス質に焼きしめた焼き物です。

貿易陶磁は、<sup>りゅうせんよう</sup>龍泉窯、<sup>けいとくちんよう</sup>景德鎮窯など中国や東アジア産の磁器で、貿易をとおして流通したものを指します。青磁・白磁・<sup>そめつけ</sup>染付など、中世の日本では作れない優れた製品を多数輸入しました。茨城県内の貿易陶磁の出土数は少なく、高級品として流通していたことがわかります。青磁は、<sup>じせき</sup>磁石を粉末にして粘土化し、その上に青緑色の釉をかけた焼き物です。日本に持ち込まれた青磁の主要な産地には、中国浙江省の龍泉窯や福建省の同安窯などがあり、宋、明代（12～16世紀）に生産されました。白磁は、灰色の粘土に灰と長石の釉をかけて作った焼き物です。産地は中国南部で作られたものが多く、碗・皿類を中心に大量に日本に持ち込まれました。染付は、<sup>こす</sup>呉須（藍色の顔料）でさまざまな下絵を描き、透明な釉をかけた焼き物で、元、明代（14～16世紀）の中国で多く作られました。

国産陶器は高級品である貿易陶磁を模倣した焼き物で、中世の関東地方では瀬戸や常滑、<sup>あつみ</sup>渥美など東海地方の窯で焼かれた製品が流通していました。瀬戸窯は、平安時代に灰釉陶器を作っていた猿投窯の伝統を受け継いでいます。一般に古瀬戸と呼ばれ、12世紀から15世紀にかけて、中世の日本では唯一釉をかけた焼き物を作っていました。常滑窯は、知多半島一帯にかけて分布した窯場で、12世紀から現代まで続く歴史ある焼き物の生産地です。中世の常滑焼は、<sup>かめ</sup>壺、<sup>かめ</sup>甕、すり鉢を主要な生産器種として、東日本を中心に全国各地に流通していました。渥美窯は渥美半島一帯に分布していた窯場で、12～13世紀ころ壺、甕などの日常品を中心に生産していましたが、14世紀以降は常滑焼との販売競争に敗れ衰退しました。市内の中世遺跡からも、古瀬戸、常滑、渥美などの東海系国産陶器と共に、龍泉窯系、景德鎮窯系、同安窯系などの中国産貿易陶磁が多数出土しています。中世の当地が、すでに東アジア世界に広がる広範な貿易流通網の一端に位置していたことが理解できます。

※上高津貝塚ふるさと歴史の広場第4回特別展図録『焼き物にみる中世の世界』（1999年）をご参照下さい。  
（塩谷 修）



土浦市内から出土した中世陶磁器片（当館所蔵）

**3/2（土）午後2時から**  
このページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 市内出土の灰釉陶器
- 東城寺寄居窯跡の須恵器



# 法雲寺庄主寮年貢納目録(県指定文化財)

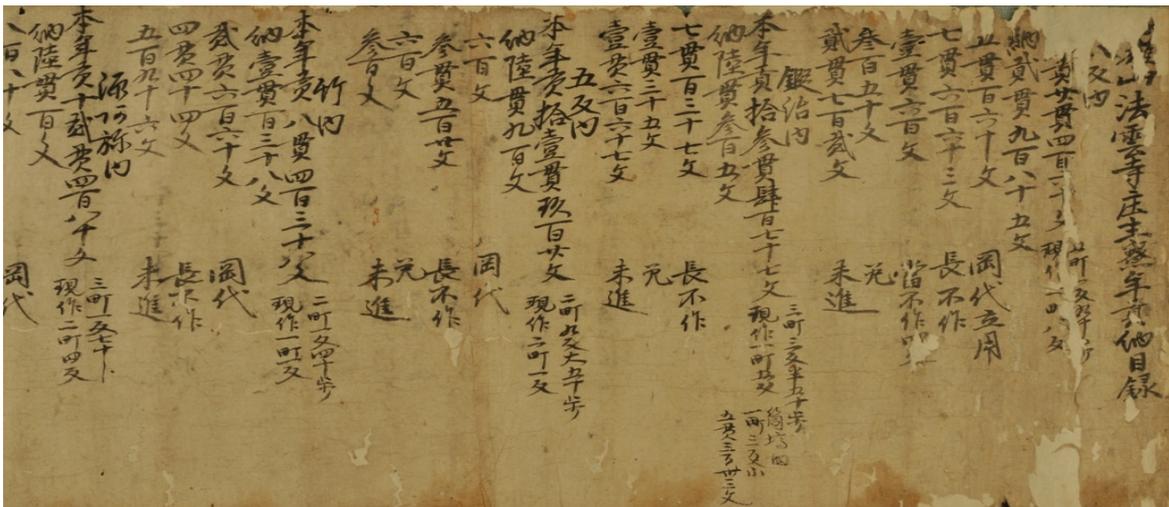
— 法雲寺に納められた年貢 —

法雲寺文書の一つに「法雲寺庄主寮年貢納目録」があります。この文書は、嘉吉3(1443)・4(1444)年に記された法雲寺所領の収納目録とそこから支払われた費用、及び長禄2(1458)年、延徳元(1489)年に記された田宮郷の田畑と在家(庄園内の屋敷と付属の田畑を含めていう称)名等が記されており、室町時代の常陸地方における寺領経営とそれに付随する村落構造や農民経済について知り得る貴重な史料となっています。

前半部分には、法雲寺の所領として「八反内」「鍛冶内」「五反内」「竹内」「源阿弥内」の五ヶ所と「田宮田」の地名も見られ、他に散在地や畠分の面積、諸費、年貢額が記されています。年貢の合計は242貫712文(1貫=1,000文)ですが、不作や免除、未進(納めていない年貢)を引いて実際に納められた額は151貫587文となっています。また、「支銭」として橋や池、寺院の修理費、飲食費などの支払い金額や支払った日付までも記されています。中には「新茶」「茶料」「茶桶」等の記載が見られ、法雲寺で製茶が行われていたことがうかがわれると共に、寺院経営に関わる諸費用の項目と金額を知ることが出来ます。

「支銭」の合計額は18貫893文となっており、納められた年貢額151貫587文から引くと、残り132貫694文となりますが、庫院に納められた金額は132貫500文と記されています。194文の違いがみられますが、常陸地方における寺領経営の収入と支出を明記した最古の史料ではないでしょうか。

従来、この時期における年貢の銭貨表示は一つの基準であって、必ずしも現実の納入形態が銭納であるとはいえないとされてきました。然しながら、この文書には収入と支出の最後に132貫500文を庫院へ納めたと記されていることから、物納ではなく銭納としてみる方が自然といえます。どの時点で物品から銭に替えられたかは不明ですが、田宮郷などの寺に近接する地域からの納入であるにもかかわらず銭納形態をとっていること、寺院経費を銭貨で支払っているなど、貨幣経済の普及がうかがえます。(中澤達也)



法雲寺庄主寮年貢納目録(法雲寺所蔵) 巻頭部分

2/23(土) 午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも中世コーナーに展示)

- 法雲寺の瓦 ●佛日(30世)・佛海・蔵外(31世)和尚像
- 梅岑和尚像(32世) ●天柱和尚像(33世)



# 土浦城模型を楽しむ

— 前編 —

土浦城模型は博物館にある一番大きな展示物です。縦 395 cm、横 107 cm、高さ 77 cmの台の上に、江戸時代の本丸と外丸の模型を据えています。江戸時代の成人男子の平均身長を 160 cmと想定し、模型には 100 分の 1 (1.6 cm) の武士の姿をした人形を配置しました。模型と人形を眺めていると、巨人にでもなった気分です。見どころの多い土浦城模型の楽しみ方を 2 回にわけてご紹介いたします。

まず、建物に注目してみましょう。中央にあるのが本丸館です。本丸は東西 48 間 (約 86m)、南北 23 間 (41 m)、敷地は 1,300 坪ありました。館は書院造りの平屋で、櫓門に面して玄関がありました。内部には御書院、御居間、御寝間、御風呂屋など帰国中の藩主が使う部屋と、御用部屋、焼火ノ間など藩士が詰める部屋とがありました。藩主が使う部屋がある空間は竹塀で仕切られ、檜皮葺きになっています。

本丸館を囲むように櫓門と東西の二層の櫓が立っています。博物館に隣接する亀城公園でこれらの建物を見ることができます。本丸から二の丸へ入り仕切門をくぐると、南側に厩があります。風通しがよくて広々とし、ここならば馬も居心地が良かったことでしょう。東側には米蔵があり、見張りの番所が設けられていました。二ノ門をくぐると外丸です。

土浦城模型は幕末に作られた「外丸表奥御殿向惣絵図面」などを基にしています。文久 2 (1862) 年、それまで幕府が方針としてきた大名の妻子の江戸住まいが緩和されたため、藩主土屋寅直の夫人と妹が土浦城に戻ってくることになりました。この絵図は夫人らの帰国に伴い改築が行われた際のもので推定されています。館は総坪数 648 坪、畳の数だけでも合計 394 畳半の大規模な建物でした。なかには近習や坊主たちが詰める表御殿 (227 坪) と、土屋家の家族とそれに仕える侍女たちの部屋がある奥御殿 (421 坪) に分かれていました。表と奥は塀で仕切られ、門も表御門と裏御門の二つがあるのを模型でも再現しています。表御殿に比べると奥御殿はそれぞれの建物が独立し、建物は廊下でつながれています。奥御殿の一部、二階建てになっている部分には藩主の居間と寝所がありました。本丸も外丸も限られた敷地いっぱい建物が建っていますが、藩主の住まいだけは斜めに突きだし、庭園を広く見せる工夫がなされています。(木塚久仁子)



外丸館の庭「土浦城模型」(当館所蔵)



本丸・厩周辺「土浦城模型」(当館所蔵)

2 / 2 (土) 午後 2 時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナーに展示)

- 常州土浦城之図
- 外丸表奥御殿向惣絵図面



# 江戸時代の日記にみる正月行事

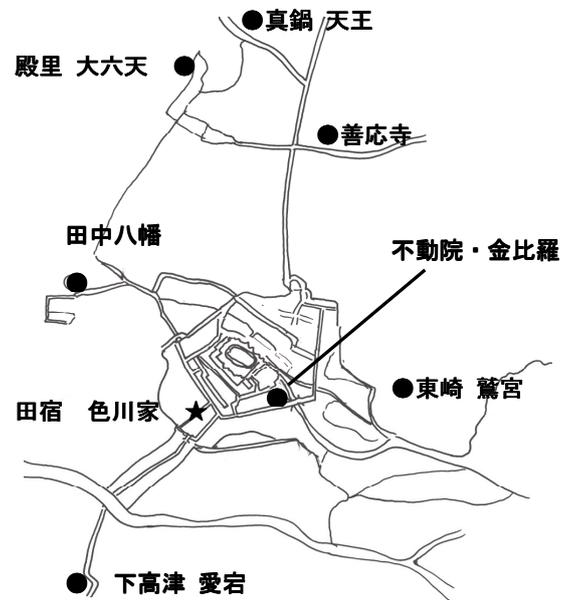
## — 土浦城下、色川家の場合 —

田宿町（現在の市内大手町）で薬種業を営んだ色川三中和弟の美年は膨大な日記を残しています。兄三  
中により文政9（1826）年に書き始められた日記「家事志」は、やがて薬種業を任される美年が記すよう  
になり、三中が川口河岸（川口町）の醤油蔵で醸造業に専念してからは、「家事記」と改題され美年だけの筆  
によるものとなりました。今回は2人の日記から土浦城下の正月の様子をご紹介します。

色川家では、12月13日に煤払い、12月25～27日頃に餅をつき、大晦日に門松を立て新年を迎えていま  
す。美年の日記によると、松は中高津村（中高津）の栄蔵から手に入れていました。栄蔵には天保2（1831）  
年に色川家の山を買って取ってもらった縁があり、慣例的にかつての持ち山から松を迎えていたのかもしれま  
せん。新しい幣束（カマジメに使用）は25日に中城町（中央1丁目）の不動院できってもらいました。田  
宿の薬店では年神（歳神、正月に迎える神様）・疱瘡（疫病の神様）・荒神（竈の神様）・宇賀神（穀物の  
神様）、川口の醤油蔵では年神・松之尾（酒造業の神様）・荒神の分を用意しています。

年が改まった1月1日、色川家では元朝式が行われました。兄の三中が川口町の醤油蔵に移ってからは、  
元日に三中が田宿へやって来て、家人一同で屠蘇を飲むことが恒例となったようです。田宿の薬店では正月  
早々、鹿島・潮来・水海道・龍ヶ崎などへ行商にでかけています。主人自ら出かけている年も多く、町内の  
年賀などもあって、田宿色川家の正月はあわただしく過ぎて行ったようです。行商から戻った1月20日に夷  
講をおこなっています。福をもたらすとされる恵比寿神をまつことで正月は終わります。なお、三中が記  
していた頃の日記には、1月8日の「松引き」と1月11日の「一鍬祝儀」（農耕の初めに行われる鍬入れの  
儀式）の記載があります。

美年の日記にはその年の恵方をはじめとして参詣した  
寺社についての記述が目立ちます。たとえば弘化3（1846）  
年の恵方は巳午（南南東）でした。元日の朝、美年は田宿  
から見て南にある愛宕（愛宕神社、下高津1丁目）へ参拝、  
その後は八幡（田中八幡神社、田中2丁目）、天王（八坂  
神社、真鍋5丁目）、鷲宮（鷲宮神社、東崎町）をまわり  
ました。亥子（北北西）が恵方の翌4年は田中八幡、大六  
天（皇産霊神社、殿里）を参拝、その後に天王、善応寺（真  
鍋3丁目）、中城の不動院と金毘羅（琴平神社）をまわり  
ました。嘉永2（1849）年は寅卯（東北東）でしたので鷲  
宮から始まり、天王、田中八幡とめぐっています。城下町  
と周辺の寺社に詣でながら、その年の安寧と家業の繁栄を  
願ったのではないのでしょうか。（萩谷良太）



土浦城下と周辺の寺社

1/5（土）午後2時から  
このページで紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 色川三中肖像画
- 墨僊漫筆之稿
- 色川家住宅模型



# 商家に伝わる市松人形

たきざわこうりゅうさい  
— 二代 瀧澤光龍齋の作品 —

女性や子供が持ち遊んだ、日本を代表する人形に市松人形があります。「市松人形」という呼び名は京坂(京阪)のもので、江戸で人形といえば、これをさすほど一般的な人形であり、高級品から手ごろな品までさまざまなものがありました。

写真は土浦の商家に伝わる市松人形です。昭和3(1928)年に嫁入り道具としてあつらえたと考えられるもので、平成に修復し着物は新しいものですが、体をくるむ和紙に捺された印章から、二代瀧澤光龍齋(義豊)[明治21(1888)~昭和41(1966)年]の作品であることがわかります。

初代の瀧澤光龍齋(義雄)[嘉永5(1852)~明治43(1910)年]は、明治期に上層の人々が愛好する高級な雛人形や市松人形などを製作販売していた初代永徳齋の弟子にあたる人物で、高級な市松人形などを得意とし、東京の市松人形づくりを代表する職人でした。二代光龍齋は初代光龍齋の実子で、父親から市松人形製作を学びました。初代に劣らぬ名工で、市松人形を得意とする職人の中心的存在でもありました。

写真とよく似た姿の人形に、答礼人形「筑波かすみ」があります。昭和2年に日米親善のため、アメリカから日本へ贈られた1万2千体余りの友情人形が、いわゆる「青い目の人形」ですが、そのお礼に日本からアメリカへ贈った市松人形を「答礼人形」と呼んでいます。都道府県等の代表として58体が京都と東京で製作されましたが、東京製の「答礼人形」の原型を彫ったのが、写真の人形の製作者である二代光龍齋でした。

「筑波かすみ」は茨城県代表として伝わるもので、光龍齋が原型から完成まで手がけた、東京製の答礼人形を代表する人形のひとつでした。アメリカのウィスコンシン州ミルウォーキー市公立博物館で保管され、平成18~19年に修復のため日本に初めて里帰りをした時、当館も巡回展の会場になりました。

光龍齋の作品は市松人形のいわば高級ブランドでした。江戸の古今雛とともに商家で飾られてきた東京製の人形は、土浦の江戸(東京)志向や商人の豊かさを如実に表しているものです。(野田礼子)

※本稿の執筆にあたっては、是澤博昭氏(大妻女子大学准教授)よりご教示をいただきました。



「市松人形」(個人所蔵)

1/26(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 土浦幼稚園に伝わる青い目の人形
- 土浦幼稚園に伝わる市松人形



# 市史編さんだより

## 飛脚便にみるお殿様の暮らし —土屋篤直の日記から—

「土浦在城中覚日記」(国文学研究資料館所蔵 常陸国土浦土屋家文書)は、現在のところ宝暦6(1756)～文政10(1827)年までが断続的に残っています。これは土浦藩主が土浦滞在中の出来事を中心に書いた日記で、今回は土屋篤直が藩主だった宝暦6年のものをご紹介します。

土浦藩主とその家族は、普段は江戸に住み、9月から12月にかけては藩主だけが土浦城に帰るといふ暮らしぶりでした(もっとも毎年土浦に帰るとは限りませんでした)。毎日の天気の記録に始まり、行事やその時の服装、狩りや乗馬、江戸の火事、江戸に戻った後の挨拶回りなどが細かく書かれています。なかでも、江戸表と土浦城を行き来する飛脚が運ぶ品物が、具体的に記録されています。宝暦6年10月13日には、11日に江戸を発った一行が無事土浦城に着いた旨をその晩のうちに江戸表へ知らせる書状を飛脚に差し立てています。ご隠居様へ1通、奥方(篤直の妻登恵子)へも1通。入れ違いに同夜10時頃には江戸表より飛脚が到来し、ご隠居様と奥方から1通ずつ書状が届きました。在城中は、ほぼ毎日のように家族や老中など江戸の大名との書状・品物(主に食品)のやりとりがなされています。以下、この年の10～12月の、篤直とご隠居様・奥方との間での品物のやりとりをまとめてみました。

**土浦から江戸表へ** 鷹狩りで捕った鴨3回、真鴨3回、雀、玉子3回、鯉4回、ばい引き(漁法)の鯉、鮒3回、こんぶ巻鮒、鮑、当地の川海老、穴塚芋4回、大根2回、類梨子、かしら(かしら芋のことか)2回、栗芋、きやら牛蒡、新そば粉、ひき抜き新そば、当地の干うどん、本丸庭・二ノ丸庭の椎(実)、庭の寒菊、小鳥味噌、餅菓子(かが餅・ちごようかん)

**江戸表から土浦へ** 煮豆3回、さつまいも3回、飴2回、まんじゅう2回、酒・新酒、肴、味噌漬小鯛、さざえ、赤貝、草鯛、からがき、白魚、さい(魚)、生海鼠、小交御肴、かくや漬(古漬の種類か)、梅干、干菓子、餅菓子、ようかん、いり菓子(炒菓子か)、かき餅、みつかん、杉折菓子(くじら餅、小まんじゅうなど)

10月19日	御隠居様より	御書一箱	さつまいも一籠
	奥方より	書状一箱	煮豆一器
10月20日	御隠居様へ	御請一箱	玉子一箱 本丸庭のまてば椎、二ノ丸庭の椎一袋ずつ一箱
	奥方へ	返書一箱	目薬一箱(奥方の右目が少し悪くなっていたので)
10月22日	御隠居様より	〈この方到着の御祝儀として下し置かれ候〉御書一箱	御返書一箱
		味噌漬小鯛三ツ	
	奥方より	返事一箱	さざえ一籠
10月23日	御隠居様へ	御請一箱	穴塚芋一籠 鯉一籠三本(昨日下し置かれ候御肴の御返礼に鯉差上候)
	奥方へ	書状一箱	大根三本(この日煮豆入れ候ふた物の移り)色付き鮑

土浦からは狩り好きの篤直が捕った獲物や近村の野菜、霞ヶ浦産と思われる魚類が、江戸表からは珍味風の魚介類や漬物、菓子等が送られています。小鳥味噌とはどんな食べ物だったのでしょうか。煮豆は篤直の好物だったのか、などと想像しながら読むのも楽しいものです。また、19日に奥方から送られた煮豆一器のお返しに、23日に「お移り」としてその器に鮑を入れて送っています。今でも「おつけぎ(お付木)」といって、食べ物などを頂いた器に、その器を空で返さずに何か一品を入れてお返しするお移りの習慣が残っているようです。今も変わらぬ贈答への心遣いが息づき、家族への思いも垣間見える興味深い日記です。

(市史編さん係非常勤職員 海老原麻里子)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は新治地区の石仏調査に関して、土浦市教育委員会の関口満さんにご執筆いただきました。

## 新治地区の石仏調査

現在、土浦市教育委員会文化課では平成 23 年度から 3 ヶ年の計画で、新治地区の石仏の調査を進めております。その内容は、2 ヶ年にわたって新治地区内の現地調査を行い、残り 1 年で資料のまとめ及び調査報告書の刊行を行うものです。実際の調査は、土浦市文化財愛護の会内に設立された「新治の石仏」調査委員会の方々と一緒に週 1～2 日程度で行っています。現地調査では、寺社や路傍などにある石仏を 1 基ずつ丹念に観察し、調査カードにその特徴や銘文などを記録し、最後に写真の撮影を行います。

昨年度の現地調査は、10 月から 3 月にかけて地区内でも北部の山々に抱かれた山ノ庄<sup>いだ やまのしょう</sup>地域で行いました。そして、今年度は 5 月以降地区内南部の台地と低地が広がる藤沢・斗利出<sup>とりで</sup>地域の調査を行ってきており、もう少しで地区内すべての地域の調査が終了しようとしています。今までのところ、調査カードを作成した石仏の数は 650 基を超え、ここに至ることができたのも、毎回一緒に御同行頂いている土浦市文化財愛護の会の方々のやる気と後押しのおかげとっております。

来年度はいよいよ調査報告書の刊行の年となります。これまでの現地調査により、新治地区内に石仏が多く存在している様子が明らかとなりつつあります。今後、報告書をまとめていくにあたり、今から 30 年前に実施された旧土浦市域の石仏調査の成果との比較検討などを通して、新治地区の特徴が浮彫りになればと思っております。また、現地調査を通して感じるのですが、もともと新治地区の背後に横たわる山々は石材の産地でもあり、そのことが石仏のあり方にどのように影響しているのかも興味深い検討課題だと思っております。

(土浦市教育委員会文化課 関口満)

### コラム(22)－「霞」の表紙－

小紙では、表紙左上に「霞」の漢字を配しています。表紙のデザインとして濃淡をつけているためはつきりとは見えにくいかもしれませんが、墨をたっぷり含んだのびやかな筆遣いを感じていただけるでしょうか？ 総合展示のテーマに「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を掲げている当館では、入館チケットにも総合展示の解説パンフレット（受付で販売しております）の表紙にも、同じ文字を使っています。この書は行書体や教科書体などパソコンのソフトに使われている書体ではありません。土浦藩の儒者であり書家としても著名だった関其寧<sup>ねい</sup>（1733～1800）の二字書「流霞」（当館所蔵）から一字を採りました。其寧は字を子永<sup>あざな しえい</sup>、号を南楼<sup>なんろう</sup>と称し、その才能を土浦藩士関思恭<sup>しきょう</sup>（1697～1765）に認められて、養子となって関家を継ぎました。篆隸楷行草のあらゆる書体を自在に書き分け、古詩、近体詩に優れていたといえます。土浦ゆかりの歴史上の人物が書いた「霞」の文字に、一度眼をお留めいただければ幸いです。

(木塚久仁子)

### 情報ライブラリー更新状況

【2012・12・11 現在の登録数】

古写真 502 点 (+5)

絵葉書 409 点 (+5)

※ ( ) 内は 2012 年 10 月 2 日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1 ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

### 霞（かすみ） 2012 年度 冬季展示室だより（通巻第 22 号）

編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央 1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～6 ページのタイトルバック（背景）は、博物館 2 階庭園展示です。

次回春季展示は、2013 年 5 月 14 日（火）～6 月下旬となります。「霞」2013 年度春季展示室だより（通巻第 23 号）は 5 月 14 日（火）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。